

『嵐が丘』と田園主義的イングリッシュネス
崇高な風景とヨーマンの記憶

法政大学教授 丹治愛

- 1 オースティンにおける田園の表象
- 2 オースティンとブロンテ姉妹
- 3 『嵐が丘』の自然の風景
- 4 『嵐が丘』の階級論的解釈
- 5 『嵐が丘』とヨーマンの消滅
- 6 『嵐が丘』のエンディング

1) ジョナサン・カラー、折島正司訳『文学と文学理論』（岩波書店、2011）、74-75

フランコ・モレッティの『ヨーロッパ小説地図、1800-1900』で強調されるのは、「小説が国民国家を象徴する形式として機能する」様子である。「それは（国歌や記念碑とは異なり）国民内部の差異を隠蔽せず、この差異を苦心しながらも物語に変換する形式である（Atlas, 20）。[中略] 読者は、「この国民国家を了解可能なものにする象徴形式を必要としていた」が、ジェーン・オースティンが出現するまで「その課題に真に応えた者はいなかった」（Atlas, 20）のである。



2) 『分別と多感』18章

エドワードは周囲の田舎の景色にあらためて感心して戻ってきた。[中略] パートン村はとても美しい村です。急な丘がたくさんあって、森には、立派な材木になりそうな木が生い茂り、こぢんまりとしたのどかな谷間には、豊かな牧草地がひろがり、こぎれいな農家があちらこちらに点在している。ぼくが考える美しい田園風景のイメージにぴったりです。美 (beauty) と実用 (utility) を兼ね備えているからです。

[中略]

「ぼくも美しい風景は好きだけど、『ピクチャレスク』という美意識とは関係ない。ひねこびた、ねじ曲がった枯れ木なんか好きじゃない。青々とした、真っ直ぐに伸びた大木のほうが好きです。荒れ果てたあばら屋 (cottages) なんか好きじゃないし、イラクサや、アザミや、ヒースの花も好きじゃない。物見の塔なんかより、こぢんまりした農家 (farm-house) のほうが好きだし、美しく着飾った盗^{バンディッツィ}賊一味なんかより、こぎっぱりした幸せそうな村人たちのほうが好きです。」

3) 『エマ』42章

ドンウェル・アビーはかなり急斜面の丘のふもとにあるが、低い石塀の向こうにはさらに急な斜面になっていて、一キロほど先に唐突な感じで、みごとな樹木におおわれた小さな丘があり、その丘に抱かれるようにしてアビー・ミル農場がある。農場の前には牧草地が広がり、そのまわりには、小川が美しい曲線を描いて流れている。

美しい眺めだ。目にも心にもやさしい、美しい眺めだ。これぞまさにイングランドの緑、

イングランドの文化、イングランドの安らぎ（English verdure, English culture, English comfort）であり、威圧感のない穏やかな風景が、太陽の光を浴びて横たわっている。

4) レイモンド・ウィリアムズ『田舎と都会』170-71

エンクロージャー裁定による、直線の生け垣や直線の道路によって区画された数学的な格子状の地割りが、〔風景〕庭園の景観の自然な曲線や散置性と同時代的に存在することになる。〔中略〕〔両者は〕一見相反する^{テイスト}審美感ように見える。しかしそれも、一方の土地は生産用として、借地人や労働者を働かせる場として組織され、他方の土地は消費用に、眺めのため、有産階級の静養、保養のため、眺望のために組織されているからにはほかならない。このような18世紀の人工風景〔数学的な格子状の地割りと風景庭園〕は、土地ブルジョワ芸術の極致であるというだけではなく、地主階級が窓やテラスの下にひろがる大地のなかに、〔中略〕農村労働や農村労働者の姿の欠落した田園風景の創出に成功したということを示している。つまり、生産にかかわる事実、森と水のある眺望〔中略〕からきれいさっぱり追放されていた。〔中略〕都合の悪い納屋や水車小屋は目につかぬところに片づけてしまった。〔中略〕遠くの丘にむかって一直線に続いている並木道、そこには全体の眺めの邪魔になるような細部はなにひとつない。このような風景を上から、造成して高くした位置から眺める。大きな窓、テラス、芝生。どっちに目をむけても視界をさえぎるものはない。管理と支配の表現。

5) 『説得』10章

彼らは、大きな囲い地のなだらかな坂道をさらに半マイルほど登っていった。囲い地では鋤で耕された畑と、新しく作られた小道が、甘美な詩的憂愁を振り払って春を取り戻そうとしている農夫の存在を物語っていた。やがて一行は、このあたりで一番高い丘の頂上にたどり着いた。

6) シャーロット・ブロンテ、1848年1月12日付、G. H. ルイス宛書簡

〔『高慢と偏見』にあるのは〕^{ダゲレオタイプ}銀板写真で撮影された、ありふれた顔の正確な肖像、そして、注意深く垣根がめぐらされ、手入れが行き届き、優美な花の植わった小綺麗な花壇に縁どられた庭園だけ。生気に満ちた明るい顔、広びろとした田園、さわやかな空気、青い丘、美しい小川などは、いっさいありません。

7) 『ノーサンガー・アビー』25章

ラドクリフ夫人の小説はすごく面白いし、その模倣者たちの小説もとても面白いけれど、たぶんああいう小説には、人間性の忠実な描写を期待してはいけないのだ。〔中略〕イタリアやスイスやフランス南部ならああいう小説に描かれたような恐ろしいことが、実際にたくさんあるかもしれない。よその国のことまで疑うつもりはない。いや、自分の国でも、北の果てや西の果てのことはわからない。でもイングランド中心部（the central part of England）では、夫から愛されていない妻といえども、国の法律と時代の風俗習慣によって、生命の安全はある程度保証されているはずだ。〔中略〕アルプス山中やピレネー山中には、善と悪が入り混じった人間はいないのかもしれない。そういう山中には、天使（angel）のような汚れなき人間と、悪魔（fiend）のような邪悪な人間の二種類しかいないのかもしれない。でもイングランドはそうではない。イングランド人の心と習慣は、みんな同じというわけではないが、たいてい善と悪が入り混じっている。

8) 『嵐が丘』における崇高なゴシック性

8-1) 'Wuthering' being a significant provincial adjective, descriptive of the atmospheric tumult to which its station is exposed in stormy weather. Pure, bracing ventilation they must have up there at all times, indeed: one may guess the power of the north wind blowing over the edge, by the excessive slant of a few stunted firs at the end of the house: and by a range of gaunt thorns all stretching their limbs one way, as if craving alms of the sun. (WH, chap. 1)

8-2) I have a strong faith in ghosts: I have a conviction that they can, and do, exist among us! (WH, chap. 29)

8-3) He probably raised the phantoms from thinking, as he traversed the moors alone, on the nonsense he had heard his parents and companions repeat. Yet, still, I don't like being out in the dark now; and I don't like being left by myself in this grim house: I cannot help it; I shall be glad when they leave it, and shift to the Grange. (WH, chap. 34)

9) ウィリアム・ワーズワス『序曲』第1巻

「天地の境界線となっていた／そそりたつ峰の背後から」「巨大な断崖が、／まるで自ら本能的な意志でももっているかのように、／ぬっと頭をもたげ」「のっそりと、生き物のように大股に私の後を／追ってきた」／「あの怖ろしいものの姿を見て以来」、「おおよそ生きている人間の姿とも似ても似つかない、／ただ力強く、巨大なものの影が、／白昼、ぬうっと私の頭の中をかすめるかと思うと、／夜は夜で、夢を騒がせるものとなった」

10) 『嵐が丘』における崇高と美、嵐と風

10-1) I approached a window to examine the weather. A sorrowful sight I saw: dark night coming down prematurely, and sky and hills mingled in one bitter whirl of wind and suffocating snow. (WH, chap. 2)

10-2) I lingered round them, under that benign sky: watched the moths fluttering among the heath and harebells, listened to the soft wind breathing through the grass, and wondered how any one could ever imagine unquiet slumbers for the sleepers in that quiet earth. (chap. 34)

10-3) The abrupt descent of Penistone Crag particularly attracted her notice; especially when the setting sun shone on it and the topmost heights, and the whole extent of landscape besides lay in shadow. I explained that they were bare masses of stone, with hardly enough earth in their clefts to nourish a stunted tree. (. . .) 'Papa would tell you, Miss,' I answered, hastily, 'that they are not worth the trouble of visiting. The moors, where you ramble with him, are much nicer: and Thrushcross Park is the finest place in the world.' (WH, chap. 18)

10-4) a bank of heath in the middle of the moors, with the bees humming dreamily about among the bloom, and the larks singing high up overhead, and the blue sky and bright sun shining steadily and cloudlessly (WH, chap. 24)

10-5) The contrast resembled what you see in exchanging a bleak, hilly, coal country for a beautiful fertile valley (WH, chap. 8)

10-6) Tell her what Heathcliff is: an unreclaimed creature, without refinement, without cultivation; an arid wilderness of furze and whinstone. (WH, chap. 18)

11) 嵐が丘とスラッシュクロス屋敷

11-1) 'Hareton, drive those dozen sheep into the barn porch. They'll be covered if left in the fold all night: and put a plank before them,' said Heathcliff. / 'Are there no boys at the farm?' / 'No; those are all.' (WH, chap. 2)

11-2) The latter [the roof] had never been under-drawn: its entire anatomy lay bare to an inquiring eye, except where a frame of wood laden with oatcakes and clusters of legs of beef, mutton, and ham, concealed it. (. . .) The apartment and furniture would have been nothing extraordinary as belonging to a homely, northern farmer (WH, chap. 1)

11-3) A high wind blustered round the house, and roared in the chimney: it sounded wild and stormy, yet it was not cold, and we were all together -- I, a little removed from the hearth, busy at my knitting, and Joseph reading his Bible near the table (for the servants generally sat in the house then, after their work was done.) (WH, chap. 5)

11-4) we saw -- ah! it was beautiful -- a splendid place carpeted with crimson, and crimson-covered chairs and tables, and a pure white ceiling bordered by gold, a shower of glass-drops hanging in silver chains from the centre, and shimmering with little soft tapers. (WH, chap. 6)

12) アーノルド・トインビー『産業革命講義』（1884）第5章

12-1) 「ヨーマン」の絶滅が急速に進行しはじめたのは [中略] 1760 年になってからである。 [中略] アーサー・ヤングは「ヨーマンと称する [中略] 真に国民の独立を守りぬいた一団の人びとの滅亡を、衷心から残念に思い」、そして「彼らの土地が、今では独占的貴族の手中にあるのを見ることに嫌悪の念を抱いていた」。1787 年には、彼は、ヨーマンが国のほとんどの地域から事実上消え去ってしまったことを認めている。

[ただし、ヨーマンの完全な消滅は、イーグルトンが 20 世紀後半の歴史学の成果をふまえて書いているとおり、実際には 1830 年代初期、まさにエミリーの生きていた時代のことだったのである。彼女は同時代的現象としてそれを体験していたのである。]

12-2) [1688 年の] 革命以後は土地を有するジェントリー階級が実際上の最高権力であった。たんに国家行政のみならず、地方行政もまた完全に彼らの手中に帰し、こうしてその自然の結果として、社会的政治的権力の基礎である土地が熱心に求められた。

12-3) ジョンソン博士は、「イギリス商人は新しい種類のジェントルマンである」という含蓄のある言葉を述べたが [中略]、18 世紀前半において、商業の拡大とともに急速に成長しつつあった諸都市において、富を蓄積した商人は、みずからをジェントルマンにするために、当然のこととして土地を買い取ったのである。 [中略] 諸旧家もまた、大商人と婚姻を結ぶことによって、家を富ませ、そしてより多くの土地を買うことができた。

13) 『エマ』4章

「ヨーマンはわたしには無縁の人ですもの。もうちょっと階級が低くて立派な人なら、

〔慈善の対象として〕興味を持つかもしれないわ〕